

J. S. Le Fanu, “Green Tea” における語り手ヘッセリウス*

竹 森 徹 士
(英文教室)

On the Role of Hesselius in J. S. Le Fanu's “Green Tea”

Tetsushi TAKEMORI

キーワード：Fantastic Literature, Nineteenth-Century Literature, Irish Literature, Short Story

19世紀のアイルランドの作家レ・ファニュ (Joseph Thomas Sheridan Le Fanu) (1814-73) は、ディケンズやウィルキー・コリンズらと同時代に活躍した人物であり、扇情小説である *Uncle Silas* (1864) などの長篇小説を残しているが、20世紀初頭、自身怪談の書き手でもあった M. R. ジェームズの再評価以降、主として怪奇短編の作品で知られている。¹⁾ McCormack による伝記の巻末に付された作品リストによれば、死後に出版された作品も含め、彼の作品として、14の長篇小説と4つの短編集、パンフレット1篇、未収録の短編等42篇、1冊の詩集があり、作家としての活動はかなり旺盛だった (McCormack 273-76)。

短編 “Green Tea” は、1869年、ディケンズが編集を務めていた *All the Year Round* に4回にわたって連載され、その後、既発表の4つの短編とともに短編集 *In a Glass Darkly* (1872) に収録された作品である。²⁾ 物語は、牧師ジェニングズ (Jennings) が実体が定かではない猿につきまとわれ、最後には自殺してしまうというものである。³⁾ “Green Tea” では、ジェニングズ自身から語られる猿の様子と猿に対する恐

怖の描写に物語の大部分が費やされ、M. R. ジェームズが賞賛するところの “crescendo” という技法、すなわち “[t]he gradual removal of one safeguard after another, the victim's dim forebodings of what is to happen gradually growing clearer” (James 495) が、猿がジェニングズを徐々に追い詰めていく様に顕著に発揮されている。

一方、“Green Tea” の形式に目を向けてみると、このジェニングズの物語は、医師であるヘッセリウス (Martin Hesselius) という人物が友人に宛てた手紙で語られるものであり、ヘッセリウスの助手である「私」(“I”) が編者としてその手紙を読者に紹介するという体裁になっている。タイトルである “Green Tea” の由来は、その牧師ジェニングズに猿がつきまとうようになったきっかけが、ジェニングズが常飲していた緑茶にあるとヘッセリウスが診断したことにあり、実際、ヘッセリウスは、ジェニングズの体験談の聞き手として、またジェニングズから信頼を得ている医師として、物語では大きな役割を果たしている。本稿では “Green Tea” における語り手であり登場人物の一人であるヘッセリウスに注目し、彼の語りや行動が物語にどのよう

な要素を加えているのか考えてみたい。⁴⁾

I.

まずレ・ファニュの怪奇短編における特徴について触れておく。実体不明の何かにつきまとわれる恐怖という主題はレ・ファニュの作品では常套的なモチーフのひとつであり、それが主人公、あるいは他のキャラクターに与える効果を克明に描いていることがレ・ファニュの物語の特質とされる。Jack G. Voller が指摘するように、レ・ファニュの作品の焦点にあるのは、「恐怖の仕掛けよりもむしろ、それを知覚するもの、あるいはその被害者の心理に与えられる効果」である。

While he certainly owed a debt to the Gothic, as well as to Irish Folklore, his innovation was to shift the primary focus from the machinery of terror to its effect on the mind of its observer/victim. (Voller 250)

またその何かとは幽霊というより、むしろ実体を持った人間、あるいは動物であることもレ・ファニュの作品の特徴である。往々にしてそれらは、主人公の過去に犯した罪にかかわる。いわば主人公の過去の罪、あるいは罪に対する罪悪感という精神的・内面的な要素が、目に見えるかたちで主人公の外部に投射され、つきまとい/つきまとわれるドラマが組み立てられることになる。Voller は続けて、“The Watcher” (1847)、“The Dead Sexton” (1871) などを挙げながら、“レ・ファニュの物語に共通する要素として、ヴィクトリア朝の美德やデコラムに則った道徳的な枠組み、“retributive justice”、すなわち「応報の処罰」を指摘し、そうした保守的な世界観のなかで、侵犯者が排除され、秩序の回復が行なわれるのだという。

Le Fanu's haunted moral universe is predicated soundly upon Victorian virtue and decorum, and even the subtlest and most surreptitious violations of these values bring consuming horror and destruction. . . . Le Fanu's haunted universe, in short, is insistently

characterized by a retributive justice that demands the fullest payment. In this conservative worldview, the established social order is always vindicated, its integrity restored by the elimination of the transgressor, the restoration of true ownership, and the disappearance of the disruptively supernatural—or psychological—menace once the wrong has been righted. (Voller 251)

Voller が挙げている “The Watcher” は “The Familiar” というタイトルで多少の修正が加えられて *In a Glass Darkly* に収録された作品である。⁵⁾ 物語では、主人公であるバートン (Burton) という海軍の司令官が、死んだはずの男につきまとわれ、その男から手紙まで受け取る。周囲の人々もその男を目撃するが、なぜバートンがそれほどおびえるのか分からず、彼は孤立を深める。バートンの病気は昂じ、彼が一人でいる寝室に、フクロウが入りこみ、叫び声とうめき声を聞いた召使が部屋に駆けつけたところで彼の息絶えた姿が発見される。最後に、その謎の男とは、かつて Burton が辛く当たったために命を落とした男だったことが明かされる。

また “Green Tea” と同時期の作品である “Squire Toby's Will: A Ghost Story” (1868) にも同様な筋が示される。これは、トービー (Toby) という地主が死んだ後、兄に代わって屋敷を相続した弟のチャーリー (Charlie) の物語である。父の死後、チャーリーはどこからともなく現れた父そっくりの犬を飼うことになる。その後彼は、その犬の夢を見たり、さらに父親らしい化け物の夢を見るようになる。あるとき兄に財産を譲る旨の証文を見つけ、それを隠してから、犬は凶暴性を増し、彼は犬を撃ち殺してしまう。物語の結末は、彼が部屋で首にクラバットをまきつけて死んでいるところで終わる。検視官は自殺だと判断するが、側近の召使クーパー (Cooper) は、「主人の死については彼なりの意見を持っていた (“But old Cooper had his own opinion about the Squire's death”)」 (“Squire” 64) という含みを持たせた言葉が締めくくりに添えられている。

あるいは、アイルランドの民間伝承に取材した

という物語も同様な筋から構成されている。"The White Cat of Drumgunniol" (1870) は、八十年以上にわたってある一族につきまとう白い猫の物語である。その一族の人々は、代々白い猫を見ると死ぬとされているが、語り手や周囲の人々によれば、それはかつて一族のものが恋人を裏切り、その恋人が失恋の痛手で亡くなったことに起因するのだという。これらの物語に共通するのは、まずつきまとう対象が複数の登場人物に認識されるものであり、また、それらは、ときには実体がある。そして、たしかに Voller の指摘するように過去の罪にたいする応報の処罰が物語を貫く筋となっている。

"Green Tea" はどうだろうか。ジェニングズにつきまとう猿は、本人にはきわめてはっきりと認識できるにもかかわらず、周囲の人々はその姿を確認することはできない。語り手であるヘッセリウスは、次のようなエピソードを紹介している。ヘッセリウスは、ジェニングズが、教会の礼拝の時、突然具合が悪くなったり、また、カーペットを目で追うような妙な仕草をしたりすることに気付く。後にジェニングズの告白により、それはジェニングズにとりついていた猿がそばにいたせいだったことが分かる。また、その猿は実体を欠いている。ジェニングズが初めて猿に遭遇したとき、彼はそれが本物の猿だと思い、傘でつついてみたところ、傘がその猿を突き抜けてしまったというエピソード、これもまたジェニングズ自身の口から語られる (23-24)。こうして物語では、ヘッセリウスをはじめとする第三者的な視点とジェニングズ自身の視点とが対照的に描かれる。つまり、ジェニングズの猿とは、幻覚症状、あるいは "spectral illusions" (実体のない幻) (25) に近いものであり、自身が苦悩するほど特殊なものではないと判断されてもおかしくない。もちろんジェニングズも初めは、自分にそう言い聞かせ、ロンドンでも有名な医者のところまで行ったという。だが猿は執拗に彼を追回す。そこで彼はヘッセリウスを頼ることになっている。

この猿の一連の出来事は、あるキャラクターの体験を三人称の語り手が語るといったものではなく、体験者であるジェニングズ自身による語りで伝えら

れたものである。テキストの主要部は 10 章からなっているが、その 6 章から 9 章までがほぼジェニングズの語りであるため、ジェニングズの語りは、埋め込まれて独立した一人称の物語のように思われる。それぞれの章には "How Mr Jennings Met His Companion", "The Journey: First Stage", "Second Stage", "Third Stage" と名づけられ、ジェニングズにつきまとう猿が次第に激しさを増していく様子が描かれており、入念な描写により、各章の見出しのごとく、猿がジェニングズを蝕んでいく「局面」が示され、「恐怖の仕掛けよりもむしろ、それを知覚するもの、あるいはその被害者の心理に与えられる効果」が読者に伝えられる。

II.

このジェニングズの物語の聞き手であり、また物語り全体の語り手であるヘッセリウスとは、自らを "medical philosopher" と呼ぶドイツ人医師である。その名のとおりに、彼は思弁的な医学を扱う人物とされる。物語で示されるヘッセリウスの能力とは、友人や周囲の人が気づかない出来事に対する鋭い観察力にある。彼は自らを次のように説明している。

A medical philosopher, as you are good enough to call me, elaborating theories by the aid of cases sought out by himself and by him *watched and scrutinized* with more time at command, and consequently infinitely more minuteness than the ordinary practitioner can afford, falls insensibly into habits of *observation*, which accompany him everywhere, and are exercised, as some people would say, impertinently, upon every subject that presents itself with the least likelihood of rewarding inquiry.

There was a promise of this kind in the slight, timid, kindly, but reserved gentleman, whom I met for the first time at this agreeable little evening gathering. I observed, of course, more than I here set down; but I reserve all that borders on the technical for a strictly scientific paper. (8, emphasis added)

彼は対象を“case”すなわち症例とみなし、“scrutinized”という言葉に示されるような、並の医者よりもはるかに詳細な観察(“observation”)にもとづいて理論を組み立てるといふ。物語ではこの鋭い観察力と対象に対する距離が、語り手として、ジェニングズを冷静に分析し、伝えるヘッセリウスの能力を保証している。だがその一方で、対象を“case”とみなす態度には、対象よりも自分の理論を優先する姿勢もまた伺える。彼がジェニングズに関心をいだくのは、彼の理論に貢献する素材となりそうな見込みがあるからなのだ。

物語の冒頭、あるパーティに招かれ、ジェニングズを観察する機会を得た彼は、ジェニングズの控えめな態度の裏に何かが隠されていると嗅ぎつけ、ジェニングズが独身であること、神学の方面の著作を書いていたこと、緑茶をよく飲んでいたこと、父親が幽霊を見ていたことなどを即座に読み取り、パーティの主催者の女性との軽妙な会話のなかで、彼女から「魔術師 (conjurer)」だとさえ呼ばれる (11-2)。

III.

その彼の観察者としての対象に対する距離は、対象に拘泥しない行動にも現れることになる。初めてジェニングズ宅を訪問した後、彼は次のような感想を述べている。

We parted cheerfully, but he was not cheerful, nor was I. There are certain expressions of that powerful organ of spirit—the human face—which, although I have seen them often, and possess a doctor's nerve, yet disturb me profoundly. One look of Mr Jennings haunted me. It had seized my imagination with so dismal a power that I changed my plans for the evening, and *went to the opera, feeling that I wanted a change of ideas.* (18, emphasis added)

もちろんここで主に読者の関心を引くのは、引用の前半部分、すなわちジェニングズの隠れた側面がヘッセリウスに与えた影響の大きさである。だが一方、気分転換にオペラに出かけたという下線部は、

ヘッセリウスの気持ちの切り替えの早さを表わす言葉として、ヘッセリウスの性格を示している。

リッチモンドにあるジェニングズ宅へ二度目の訪問の際、彼はジェニングズから猿の話を持ち明けられ、ジェニングズが、また猿が現れたらいつでも連絡するように、そして自分はジェニングズの病を究明するまでは他のことは考えない、とジェニングズに告げてから、彼と別れ、自分の宿に寄ってから、別の宿に泊まってジェニングズの症例について考えることにする。

I merely called at my lodgings, and with a travelling-desk and carpet-bag, set off in a hackney-carriage for an inn about two miles out of town, called The Horns, a very quiet and comfortable house, with good thick walls. And there I resolved, without the possibility of intrusion or distraction, to devote some hours of the night, in my comfortable sitting-room, to Mr Jennings's case, and so much of the morning as it might require. (34)

ヘッセリウスは、“comfortable”を繰り返して、宿の居心地の良さを強調する。こうした態度には、ジェニングズの苦境を共有する姿勢とは相容れないものがある。さらに、邪魔されないように誰にも居場所を知らせなかったため、猿が現れたことを知らせる伝言を直接受け取ることはできず、ジェニングズを救うことに失敗する。結局のところ、ヘッセリウスにとっては、“Mr Jennings's case”という言葉に示されるように、症例として以上の関心をジェニングズに抱くことはない。

IV.

次の引用は、ヘッセリウスがジェニングズの召使から彼の自殺を知らされ、現場に赴いた後に彼が記した言葉で、ヘッセリウスとジェニングズの物語に一応の区切りがつけられる箇所である。

Jones had no more to tell. Poor Mr Jennings was very gentle and very kind. All his people were

fond of him. I could see that the servant was very much moved.

So, dejected and agitated, I passed from that terrible house, and its dark canopy of elms, and I hope I shall never see it more. While I write to you I feel like a man who has but half waked from a frightful and monotonous dream. My memory rejects the picture with incredulity and horror. *Yet I know it is true. It is the story of the process of a poison*, a poison which excites the reciprocal action of spirit and nerve, and paralyses the tissue that separates those cognate functions of the senses, the external and the interior. Thus we find strange bedfellows, and the mortal and immortal prematurely make acquaintance. (37, emphasis added)

動揺と哀悼の気持ちは見られるものの、ヘッセリウスには自分の手違いがジェニングズを死に至らしめたかもしれないことに対する悔恨の念は見られない。また、ここまで読んできた読者がまず頭に描くのは、猿の復讐がジェニングズの自殺の原因かもしれないという疑念であり、猿と自殺との因果関係をヘッセリウスが明らかにしてくれるだろうという予測のはずだが、その予測は外され、後に訪れるアンチ・クライマックスに意表を突かれることになる。

物語はここでいったん終わり、それからヘッセリウスの解説から成る "Conclusion" と呼ばれる章に移る。この章は手紙でありながら、"A Word for Those Who Suffer" と題されており、その文章は次のように始まっている。

Conclusion

A WORD FOR THOSE WHO SUFFER

My dear Van L—, you have suffered from an affection similar to that which I have just described. You twice complained of a return of it.

Who, under God, cured you? Your humble servant, Martin Hesselius. Let me rather adopt the more emphasized piety of a certain good old French

surgeon of three hundred years ago: "I treated, and God cured you."

Come, my friend, you are not to be hippish. Let me tell you a fact.

I have met with, and treated, as my book shows, fifty-seven cases of this kind of vision, which I term indifferently "sublimated," "precocious," and "interior."

There is another class of affections which are truly termed—though commonly confounded with those which I describe—spectral illusions. These latter I look upon as being no less simply curable than a cold in the head or a trifling dyspepsia.

It is those which rank in the first category that test our promptitude of thought. Fifty-seven such cases have I encountered, neither more nor less. And in how many of these have I failed? In no one single instance.

There is no one affliction of mortality more easily and certainly reducible, with a little patience and a rational confidence in the physician. With these simple conditions, I look upon the cure as absolutely certain.

You are to remember that I had not even commenced to treat Mr Jennings' case. I have not any doubt that I should have cured him perfectly in eighteen months, or possibly it might have extended to two years. Some cases are very rapidly curable, others extremely tedious. *Every intelligent physician who will give thought and diligence to the task, will effect a cure.* (38, emphasis added)

ヘッセリウスの説明によれば、彼の手紙の相手の Van Loo は、ジェニングズと同じような病気を抱えたことがあり、またヘッセリウスは同様な症例を示す患者を 57 例扱ったことがあり、いずれも彼の手によって患者の病は治癒したという。さらに、その治療は簡単なもので、「仕事に思慮と情熱を傾ける聡明な医者は誰でも ("every intelligent physician") 治療可能なのだ」という。ジェニングズの病気は "similar"、

“this kind of” という言葉で他の患者と一般化され、さらに、ヘッセリウスしか治療できないと思わされていたはずの病気は、「聡明な医者なら誰でも」治せるものになっている。ジェニングズは 58 番目の患者という数字に変えられ、彼の体験の特異性・異常性は剥奪されるのだ。Hesselius の解説はさらに続き、以下のような言葉が述べられる。

You know my tract on *The Cardinal Functions of the Brain*. I there, by the evidence of innumerable facts, prove, as I think, the high probability of a circulation, arterial and venous in its mechanism, through the nerves. Of this system, thus considered, the brain is the heart. The fluid, which is propagated hence through one class of nerves, returns in an altered state through another, and the nature of that fluid is spiritual, though not immaterial, any more than, as I before remarked, light or electricity are so.

By various abuses, among which the habitual use of *such agents as green tea* is one, this fluid may be affected as to its quality, but it is more frequently disturbed as to equilibrium. This fluid being that which we have in common with spirits, a congestion found upon the masses of brain or nerve, connected with the interior sense, forms a surface unduly exposed, on which disembodied spirits may operate: communication is thus more or less effectually established. Between this brain circulation and the heart circulation there is an intimate sympathy. The seat, or rather the instrument of exterior vision, is the eye. The seat of interior vision is the nervous tissue and brain, immediately about and above the eyebrow. You remember how effectually I dissipated your pictures by the simple application of iced eau-de-cologne. Few cases, however, can be treated exactly alike with anything like rapid success. Cold acts powerfully as a repellant of the nervous fluid. Long enough continued it will even produce that permanent insensibility which we call numbness, and a little longer, muscular as well as sensational

paralysis.

I have not, I repeat, the slightest doubt that I should have first dimmed and ultimately sealed that inner eye which Mr Jennings has inadvertently opened. The same senses are opened in delirium tremens, and entirely shut up again when the over-action of the cerebral heart, and the prodigious nervous congestions that attend it, are terminated by a decided change in the state of the body. It is by acting steadily upon the body, by a simple process, that this result is produced—and inevitably produced—I have never yet failed.

Poor Mr Jennings made away with himself. But that catastrophe was the result of a totally different malady, which, as it were, projected itself upon that disease which was established. His case was in the distinctive manner a complication, and *the complaint under which he really succumbed was hereditary suicidal mania.* Poor Mr Jennings I cannot call a patient of mine, for I had not even begun to treat his case, and he had not yet given me, I am convinced, his full and unreserved confidence. If the patient do not array himself on the side of the disease, his cure is certain. (38-40, emphasis added)

ヘッセリウスによれば、緑茶が脳や神経をめぐる体液の変質あるいは均衡の変化を誘発し、内的感覚に“disembodied spirit”すなわち猿の姿をしたものが働きかけてきたのだという。ジェニングズを苦しめた猿のもとである緑茶は、術学的ともいえる医学・哲学的な言説のなかに埋没するだけでなく⁶⁾、“such agents as green tea”といった言葉で一般化されてしまい、“Conclusion”の直前の章の末尾で“poison”とまで仄めかされた特別な何かを期待した読者は肩透かしを食らう。それとも緑茶がこれほど刺激적인ものだと知って、あらためて緑茶に不気味なものを感じるという種明かしになるのだろうか。⁷⁾

ジェニングズの猿は緑茶に誘発されたものであり、自殺の主因は遺伝によるものとするヘッセリウスの診断は、物語においては、荒唐無稽とも思われるく

らいに強引な因果関係の設定を読者に強いることになる。物語のなかで緑茶が出てくるのは、ヘッセリウスがパーティの主催者にジェニングズが緑茶を多量に飲んでたことを指摘して驚かせた箇所（11）と、ジェニングズが著書の執筆に専念しているとき、緑茶を飲んでたと述べた箇所（22）しかない。また、遺伝の自殺を想定できそうな手がかりについては、これもパーティの主催者に、ジェニングズの父が幽霊を見る人物だったという箇所（11）と、ジェニングズの告白のなかで、猿がジェニングズに冒瀆的な言葉を浴びせ始め、自殺をけしかけてきたと述べた箇所（32）しかない。そのような文脈の中で罪をあらわすほどの象徴的な意味を緑茶に与えることは難しく、また、物語の結末部において自殺が遺伝によるものだと説明することは、これまでの物語の事件の因果関係の構築を無効化してしまうものでしかない。

V.

しかし、そうした想定は罪と報復の幽霊物語を読むとする読者の期待である可能性も否定できない。むしろ、則るべき幽霊物語の約束事をはぐらかし、ジェニングズの体験に満足のゆく因果関係に基づいた意味をもたらさない、あるいはもたらすことのできない医師ヘッセリウスを語り手として配していることがこの物語の特徴なのである。

レ・ファニュの物語にはしばしば医者が脇役として登場し、おざなりな診断を下して、何かに取り憑かれている主人公の苦痛を和らげることができず、主人公の病が医学では解決できないことを示す。彼らは超自然現象の因果関係、すなわち応報の物語の解釈コードを持たないのだ。

冒頭で紹介した "Squire Toby's Will" で、主人公のチャーリーは、落馬して気を失っていたときに、死んだはずの父親が側にいたという奇妙な体験を召使のクーパーに教えるときに、次のように切り出す。

"It's not a great deal, Cooper, but it troubles me, and I would not tell it to the parson nor doctor; for, God knows what they'd say, though there's nothing to signify in it. But you were always true to the family,

and I don't mind if I tell you. ("Squire" 47)

チャーリーはクーパーを、自分の体験を意味あるものにする ("signify") ことのできる相手だと期待している。"Green Tea" において不在なのは、このクーパーのような人物と解釈の枠組みである。結果、ジェニングズは過去の罪、報復と処罰という一連の幽霊物語の主人公たる資格を失ってしまう。"Green Tea" とは、物語の主役の座を与えられず、孤独のうちに命を落とすジェニングズの疎外の物語である。誰とも体験を共有できぬまま得体の知れない猿につきまといわれるという奇怪な物語は、強迫観念にも似た恐怖を感じさせるが、そうした奇怪な体験が固有の物語とされず、58 人目の症例として処理されてしまう疎外感、その孤独の恐怖をさらに高めるのではない。

Julia Briggs によれば、ヘッセリウスは典型的な "psychic doctor" とされる。"psychic doctor" とは、精神分析学がまだ登場していない時代、そして聖職者らがすでに憑依や幻覚現象について解決法を与えられなくなっていた時代の現実的欲求をフィクション上において満たすキャラクターだという。憑依現象を解決するはずの聖職者が、逆に解決を求めて医師にすぎるという "Green Tea" は、いわゆる悪魔祓いの役割が聖職者から医師に変わった時代を示している。Briggs はフィクションにおける "psychic doctor" の特徴を次のように述べている。

The psychic doctor is usually an enigmantic and unworldly figure whose scattered hints as to his interpretation at first only serve to increase our suspense, while his final explanation often introduces a further level of meaning to the story, or adds conviction by providing a semi-scientific explanation. This need not detract from the terrors of the tale, since it does not explain them away, but merely reveals some sort of logic of cause and effect behind them. The writer's success with the supernatural so often depends on his ability to tie his thrills down to some recognizable—and therefore feared—

phenomenon, as Poe relates the rotting corpse of M. Valdemar to the 'facts' of mesmerism, for example. (Briggs 59-60)

いわば合理的に説明し尽くすことを回避して物語の結末に曖昧さを残す手段という点でヘッセリウスのキャラクターは適切だったと言える。だが、緑茶が猿を生み出したと言っているに等しい彼の解説は、果たして Briggs の言う “some recognizable—and therefore feared—phenomenon” につながり得る、ある種の因果関係を確実に読者に示すことができているだろうか。“Green Tea” の結末に我々はそうしたレ・ファニユの意図をどの程度読み取ることができるのだろう。ヘッセリウスの診断に、ジェニングズの恐怖体験をグロテスクな喜劇に大きく逸脱させるアンチ・クライマックスを狙おうとしたレ・ファニユの意図を読み取ることもできるのではないか。“Green Tea” において不気味なのは、ヘッセリウスの診断がジェニングズの体験に合理的な解釈が与えられないことではなく、ヘッセリウスの診断が作品を怪奇物語と読むべきかどうかさえ迷わせるほどの要素をも孕んでいることであり、そのような結末を用意することによって作者レ・ファニユがどのような効果を狙っているのかを明確に見定められないことなのである。レ・ファニユの作品群において、医師が語り手の役割をするのはきわめて珍しい。そうした意味では、“Green Tea” は彼の代表作でありながら、彼の作品のなかでは特異な存在である。ヘッセリウスなる医師が語り手として判断を下す、罪と報復の物語が不在の世界は、疎外された主人公を効果的に描くだけでなく、怪奇物語という枠組みから逸脱した、悲劇とも喜劇ともつかない世界をも生み出しているのである。

* 本稿は、日本英文学会中国四国支部第 57 回大会 (於山口大学、2004 年 10 月) における原稿に加筆、修正を施したものである。

- 1) 1923 年に催された英国王立研究所における、レ・ファニユの小説と短編についての講演記録 (James 491-96)、およびジェームズ自らが編纂を手がけたレ・ファニユの短編集 *Madam Crowl's Ghost and Other Tales of Mystery* (1923) に付された序文および結び (James 497-505) を参照。
- 2) ディケンズはレ・ファニユ宛の書簡 (1869 年 9 月 24 日付) で “Green Tea” を賞賛している (“how very admirably the story of ‘Green Tea’ was told” (qtd. in Rockhill, “A Mind” xxix))。
- 3) 牧師ジェニングズを執拗に追回す猿をダーウィニズムの表象とする解釈に Hendershot 100-05 がある。“Green Tea” をめぐるこれまでの解釈の概観は Rockhill, “A Mind” xxix-x を参照。
- 4) J. S. Le Fanu, “Green Tea,” *In a Glass Darkly* (Oxford: Oxford UP, 1993)。この作品からの引用は全てこの版により、括弧内に頁数のみを記す。
- 5) “The Familiar” は “The Watcher” というタイトルでレ・ファニユが当時作品を寄稿していた *Dublin University Magazine* の 1847 年 11 月号に掲載され、1851 年の短編集 *Ghost Stories and Tales of Mystery* に再録され、部分的な修正とヘッセリウスの序文を付して題名を変更して *In a Glass Darkly* に収められた作品である (Rockhill, “Publication History” 219-21)。
- 6) このヘッセリウスの説明とスウェーデンの哲学者、神秘思想家エマヌエル・スウェーデンボリの思想との関連については Tracy, Introduction xii-xiii を参照。
- 7) ただし、茶を精神に刺激作用を及ぼす飲用物とする見方は *Uncle Silas* にも見られる。ヒロインのモード (Maud) が亡霊を見ると周囲に訴えているとき、医師のジョークス (Jolks) は彼女にお茶をやめてチョコレートと黒ビールに変えるように勧める (*Uncle Silas* 334)。だが、強力な精神的影響を及ぼす飲用物として、むしろ阿片と

の類推を念頭に置いていた可能性はある。*Uncle Silas* に登場するサイラス (Silas Ruthyn) は大量の阿片常用者であり、登場人物の一人ブライアリー (Doctor Bryerly) は彼の異常を説明する際に、ド・クインシーの『イギリス阿片常用者の告白』に言及している (*Uncle Silas* 243)。*Uncle Silas* においても阿片は "poison" と呼ばれている (*Uncle Silas* 290)。また、ちょうど "Green Tea" が連載される前年の 1868 年は薬事法 (Pharmacy Act) が制定され、初めて阿片の販売に規制が加えられた年だった。その 1868 年は、ウィルキー・コリンズが阿片によるトリックを登場させる小説 *The Moonstone* を *All the Year Round* に連載していた年でもある。

Bibliography

- Briggs, Julia. *Night Visitors: The Rise and Fall of the English Ghost Story*. London: Faber, 1977.
- Hendershot, Cyndy. *The Animal Within: Masculinity and the Gothic*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1998.
- James, M. R. *A Pleasing Terror: The Complete Supernatural Writings*. Eds. Christopher Roden and Barbara Roden. Ashcroft: Ash-Tree P, 2001.
- Le Fanu, J. S. "The Familiar." *In a Glass Darkly* 41-82.
- . "Green Tea." *In a Glass Darkly* 5-40.
- . *In a Glass Darkly*. The World's Classics. Ed. and introd. Robert Tracy. Oxford: Oxford UP, 1993.
- . "Squire Toby's Will: A Ghost Story." *Haunted* 43-64.
- . *The Haunted Baronet and Others: Ghost Stories 1861-70*. Ed. and introd. Jim Rockhill. Ashcroft: Ash-Tree P, 2003.
- . *Mr Justice Harbottle and Others: Ghost Stories 1870-73*. Ed. and introd. Jim Rockhill. Ashcroft: Ash-Tree P, 2005.
- . *Uncle Silas: A Tale of Bartram-Haugh*. Penguin Classics. Ed. and introd. Victor Sage. Harmondsworth: Penguin, 2000.
- . "The White Cat of Drumgunniol." *Mr Justice* 11-19.
- McCormack, W. J. *Sheridan Le Fanu*. 3rd ed. Phoenix Mill: Sutton, 1997.
- Penzoldt, Peter. *The Supernatural in Fiction*. New York: Peter Nevill, 1952.
- Rockhill, Jim. "A Dream of the Shadow of Smoke: The Final Years & Supernatural Fiction of Joseph Sheridan Le Fanu, 1870-1873." Introduction. Le Fanu, *Mr Justice* ix-xxxvi.
- . "A Mind Turned In Upon Itself: The Life & Supernatural Fiction of Joseph Sheridan Le Fanu from 1861-1870." Introduction. Le Fanu, *Haunted* ix-xxxvi.
- . "Publication History of Joseph Sheridan Le Fanu's Supernatural Fiction Published during His Lifetime." Le Fanu, *Mr Justice* 219-21.
- Thomson, Douglass H., Jack G. Voller, and Frederick S. Frank, eds. *Gothic Writers: A Critical and Bibliographical Guide*. Westport: Greenwood P, 2002.
- Tracy, Robert. Introduction. *In a Glass Darkly*. By J. S. Le Fanu. vii-xxviii.
- Voller, Jack G. "Joseph Sheridan Le Fanu." Thomson, Voller, and Frank 248-53.

(平成 17 年 10 月 31 日受理)